

表2 内科,小児科,眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期間	インフルエンザ	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	百日咳	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	12/30～	104	60	4	9	277	36	4		10					
2	1/6～	255	64	4	18	289	36	3		21		1			
3	1/13～	480	30	3	15	248	25		1	19					
4	1/20～	859	36	5	21	260	26			17	1				
5	1/27～	924	40	4	21	231	25		3	14			2		
6	2/3～	732	30	3	13	204	18	2	2	14					
7	2/10～	734	21	1	11	182	19	1	2	10					
8	2/17～	769	12	4	22	148	18			17			1		
9	2/24～	830	14	1	24	150	20	1	2	14	1	1			
10	3/3～	629	8	3	21	130	22	1	2	10		3			1
11	3/10～	648	7	6	18	145	22	1	4	15	1	1	1		
12	3/17～	564		5	12	146	17		2	18	2	1			1
13	3/24～	321	4	3	19	127	14		1	21		5	2		
14	3/31～	114	4	2	18	119	14		2	17			2		
15	4/7～	84	1	3	17	126	20		1	15					
16	4/14～	115	4	5	13	180	27			13		2	1		
17	4/21～	135	1	8	18	209	23		1	27	1	1	2		1
18	4/28～	93	4	6	15	205	22			18	1		2		
19	5/5～	45		7	10	148	28	2		15		2			
20	5/12～	30	3	10	17	207	18			21		4			
21	5/19～	30		10	28	200	16	3	1	24		11			
22	5/26～	12		22	17	199	15			19	2	12	2		
23	6/2～	4	2	10	16	180	13	1		20	3	26	1		
24	6/9～		2	15	15	153	21		1	19	1	38	2		
25	6/16～			12	20	137	16	3		18		59	2		
26	6/23～	1		11	20	138	10	3	1	18	1	81			
27	6/30～	3		16	19	109	14	4	1	23	2	103			
28	7/7～			17	18	112	5	4	2	19		108	4		
29	7/14～			25	20	95	9	4	1	20	1	129			
30	7/21～	-	1	1	9	107	9	5	2	20		91	2		
31	7/28～	-	1	8	3	99	5	3		24	1	73	2		
32	8/4～			18	11	105	4	4	2	16		49			1
33	8/11～			10	12	110	11	2	3	24	1	46	3		1
34	8/18～	1	1	18	13	95	8	4	2	23	1	18			
35	8/25～	3	3	7	11	92	6	14	1	14	1	14	3		1
36	9/1～		22	16	4	110	11	21		27		18			
37	9/8～	3	30	13	14	116	11	13		20	1	5	4		
38	9/15～	2	36	27	9	113	21	9		19	1	1	2		
39	9/22～	1	41	25	12	89	16	2		18		2	1		
40	9/29～	2	53	35	8	92	17	7	2	20	1		2		1
41	10/6～	1	68	15	24	122	12	6	2	15			1		1
42	10/13～	5	58	13	13	106	22	7		15					
43	10/20～		40	16	26	125	14	9		28		1	1		
44	10/27～	2	52	9	22	123	15	6	1	19	1	1	1		1
45	11/3～	1	64	17	20	99	16			14					
46	11/10～	4	73	17	20	103	14			22			2		
47	11/17～	2	98	14	26	136	14	4	1	25					1
48	11/24～		119	19	30	146	14	4	1	14		1	1		
49	12/1～	34	142	18	30	127	17	3		15		3			1
50	12/8～	145	181	18	28	190	13	6		11					1
51	12/15～	299	205	13	25	207	21	12		11					
52	12/22～	648	203	10	19	228	29	6		14			2		3
合計		9,668	1,838	582	894	7,894	889	184	47	934	25	911	51	0	15

3 眼科定点報告対象疾患の動向

(1) 急性出血性結膜炎

本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性も見られず、報告数は低いままで微増微減を繰り返すとされる。

本年の報告はなく、過去5年間でも毎年0～2件で推移し、徳島県内での流行は見られていない。

(2) 流行性角結膜炎

年間報告数は15件であり、前年(22件)とほぼ変わらず、週あたり報告数も年間を通して0.8件/定点以下の低値で推移した。

年齢層別報告数は、10歳代13.3%、30歳代33.3%、40歳代26.7%、50歳代6.7%、60歳代以上20.0%と、年齢による特徴は見られなかった。

4 基幹定点報告対象疾患の動向

(1) 週報告対象疾患

細菌性髄膜炎の年間報告数は1件(60歳代)であり、病原体は、黄色ブドウ球菌が検出されている。過去10年間においては、最も報告の多かった平成22年(10件)を除くと年数件(0～5件)で推移している。

無菌性髄膜炎の年間報告数は1件(40歳代)であり、前年(9件)、前々年(9件)と比べ減少した。病原体は検出されていない。

マイコプラズマ肺炎の年間報告数は26件であり、前年(17件)とほぼ変わらなかった。過去5年間では平成23年が88件と最も多い。季節的な特徴は見られず、週あたり報告数も年間を通して0～0.6件/定点の低値で推移した。年齢層別報告数は、5歳未満19.2%、5～9歳50.0%、10～14歳15.4%、20歳代以上15.4%であった。例年同様に1～9歳からの報告数が約70%を占め、幼児及び学童に多い傾向がみられた。

本年は、クラミジア肺炎の報告がなかった。過去5年間では、平成22年に1件、平成25年に3件の報告が見られている。

ロタウイルスによる感染性胃腸炎は年間32件報告され、春先から初夏及び初冬に報告が多いなど季節的な特徴が見られた。年齢層別報告数では、5歳未満87.5%、5～9歳9.4%、10～14歳3.1%で、5歳未満の乳幼児からの報告が大半を占めた。

(2) 月報告対象疾患(表3)

薬剤耐性菌感染症の総報告数は352件であり、前年(358件)とほぼ同数であった。過去5年間でも平成22年(473件)以外は350～400件で推移し、大きな変化は見られていない。

表3 基幹定点(月報)報告対象疾患の月別報告数

	メチシリン耐性 黄色ブドウ球菌 感染症	ペニシリン耐性 肺炎球菌 感染症	薬剤耐性 緑膿菌 感染症	薬剤耐性 アシネトバクター 感染症
1月	26	1		
2月	30	3		
3月	23	2		
4月	21	1		
5月	25	1		
6月	33	2	1	
7月	37			
8月	21			
9月	26			
10月	34	1		
11月	36	1		
12月	25	2		
合計	337	14	1	0
前年	326	27	5	0

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌の年間報告数は337件(男性189件、女性148件)であり、前年(326件)と変化は見られなかった。年齢別報告数も前年同様に、60歳以上からの報告が多く全体の約75%を占め、男女別でも男性の報告数が女性よりやや多く報告された。

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症の年間報告数は14件(男性8件、女性6件)と、前年(27件)から減少した。年齢別では、10歳未満(約79%)からの報告が多くを占めた。

薬剤耐性緑膿菌感染症の年間報告数は1件(男性、70歳以上)であった。毎年、ほぼ10件以内の届出数で推移している。

薬剤耐性アシネトバクター感染症は、平成23年2月から新たに追加された疾患であるが、届出は無かった。本疾患は平成26年9月19日より五類全数把握疾患に追加された。

5 性感染症定点報告対象疾患の動向(表4)

性感染症患者は、平成25年に定点病院が一部変更されたことより単純に比較できないものの、平成24年以前は毎年300～400件で推移していた総報告数が、平成25年は547件、本年は652件と2年続けて増加した。男女別では、男性347件(前年298件)、女性305件(前年249件)と男性、女性とも報告数は増加した。疾患別では、前年同様に性器クラミジア感染症(42.5%)、性器ヘルペスウイルス感染症(42.9%)の割合が非常に多く、尖圭コンジローマ(8.4%)、淋菌感染症(6.1%)の順に多かった。

	性器クラミジア 感染症	性器ヘルペス 感染症	尖圭 コンジローマ	淋菌 感染症
1月	20	20	5	2
2月	19	16	6	
3月	15	24	8	2
4月	29	35	1	5
5月	21	25	5	4
6月	27	16	8	3
7月	32	32	4	6
8月	30	19	5	4
9月	23	29	3	5
10月	18	29	2	4
11月	16	18	3	
12月	27	17	5	5
合計	277	280	55	40
前年	239	229	50	29

性器クラミジア感染症の年間報告数は 277 件と前年（239 件）より増加し、月毎に若干の変動は見られたものの季節的な特徴は示さず、年間を通じて報告された。男女別では男性 190 件（前年 174 件）、女性 87 件（前年 65 件）と男性が全体の約 7 割を占め、男女とも報告数は前年を上回った。年齢別報告数は、10 歳代 5.1%、20 歳代 47.3%、30 歳代 30.3%、40 歳代 12.6%、50 歳代以上 4.7%と、20～40 歳代の報告が全体の 90.2%を占めた。

性器ヘルペスウイルス感染症の年間報告数は 280 件（男性 77 件、女性 203 件）であり、前年（229 件）から大きく増加した。性感染症全体では、男性が女性より多く報告されているが、本疾患は女性が約 7 割を占めるなど、女性の割合が他の疾患に比べ高かった。年齢別報告数は、10 歳未満 0.4%、20 歳代 29.3%、30 歳代 21.8%、40 歳代 15.4%、50 歳代 14.3%、60 歳代 9.3%、70 歳代以上 9.6%と、20 歳代、30 歳代でやや多かったものの、各年齢層から報告された。また、60 歳以上の高齢者からの報告数が 18.9%と他の性感染症と比較して多い傾向が見られたが、潜伏していたウイルスによる再発の可能性も考えられる。

尖圭コンジローマの過去 5 年間における年間報告数は、40 から 60 件で推移している。本年も 55 件（男性 44 件、女性 11 件）報告され、性別では性器クラミジア同様に男性が多く約 8 割を占めた。年齢別報告数は 10 歳代 1.8%、20 歳代 38.2%、30 歳代 36.4%、40 歳代 12.7%、50 歳代 7.3%、60 歳以上 3.6%と、他の年代に比べ 20 歳代、30 歳代からの報告が多く全体の約 75%を占めた。

表 4 性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

淋菌感染症の年間報告数は 40 件と前年（29 件）からやや増加した。過去 5 年間では毎年 20～40 件の範囲で推移している。男女別では、男性 36 件、女性 4 件と男性からの報告が約 9 割を占めた。年齢別報告数は、20～40 歳代からの報告が全体の約 90%を占めた。

IV まとめ

平成 26 年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について動向を検討した。

全数把握対象疾患では、例年同様「結核」が最も多く全体の約 7 割を占めた。報告数は前年とほぼ同じく、年齢別に症状を見た場合、60 歳以上では「患者」が大部分を占め、「無症状病原体保有者」の職業別では医療・介護などの施設関係者が多く見られたことより、施設関係者に対する感染予防啓発、施設においては施設内感染対策の徹底が重要と考えられた。

腸管出血性大腸菌感染症は平成 24 年を境に減少し、本年も少なかった。平成 24 年 6 月厚生労働省通知による牛生レバーの提供禁止の効果があつたと推察される。しかし、夏季を中心に報告は続いており、多くが国内にて感染したものと推定されることより、今後も手洗いの徹底等予防啓発を行っていききたい。

本年は、「重症熱性血小板減少症候群」や「日本紅斑熱」、「つつが虫病」などダニや昆虫の刺咬による感染症が、野外作業機会の多い中高年者を中心に多く報告された。また東京都を中心に約 70 年ぶりに「デング熱」の国内発生例が見られており、ダニ・昆虫媒介性疾患に対する正しい知識とともに予防対策の啓発が重要と考えられた。

前年、春先を中心に全国的に大流行し、徳島県においても 5 年ぶりに発生報告のみられた風しんは、今年は大きく減少したものの、県内での発生報告は続いている。生まれてくる赤ちゃんが CRS を引き起こすことのないよう、抗体を保持する割合の低い若い年齢層の男性を中心に、ワクチン接種による予防啓発を引き続き行っていきたい。

定点把握対象疾患では、昨年同様、冬から春先にかけて「インフルエンザ」、「感染性胃腸炎」が流行した。夏風邪の代表とされる「ヘルパンギーナ」は前年と同様の流行パターンを示したが、「手足口病」は流行のみられた前年と比べ大きく減少した。また例年秋口から流行が始まる「RS ウイルス感染症」は、例年より流行開始時期も早く 2 年続けて流行が見られた。

眼科定点報告疾患では、急性出血性結膜炎、流行性角結膜

炎とも前年と変化なく、流行は見られなかった。

基幹定点報告疾患は、週報告対象疾患である細菌性及び無菌性髄膜炎、マイコプラズマ肺炎も年間を通じて報告数は低値で推移したが、ロタウイルスによる感染性胃腸炎は、春先から初夏及び初冬に報告が多く、季節的な特徴が見られた。

月報報告対象疾患である薬剤耐性菌感染症については、総報告数に大きな変化は見られず「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症」が大半を占めた。

また、性感染症患者は、平成 25 年に定点病院が一部変更されたことより単純に比較できないものの、2 年続けて増加した。男女別では、女性の報告数が増加したものの、依然男性からの報告が多く、報告数の多い 20～30 歳代の男性を中心に引き続き啓発を行うとともに、10 歳代からの若年者に対する予防教育も重要と思われる。

今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに、迅速かつ適切な情報提供を行っていききたい。